

令和4年度第3回 京丹後市文化芸術振興審議会（会議録）

1. 開催日時 令和4年9月16日（金）午後1時30分～4時00分
2. 開催場所 京丹後市大宮庁舎 1階 大宮保健センター
3. 出席者氏名
 - (1) 審議会委員
上田委員、田中委員、土出委員、藤原哲委員、増田委員
松本委員、安井委員、山内委員、吉岡委員
※ 欠席6名（榎田委員、後藤委員、谷口委員、藤原可委員、丸山委員、山田委員）
 - (2) アドバイザー
田中圭一氏、甲斐少夜子氏、藤野一夫氏、近藤のぞみ氏、河合温美氏
 - (3) 事務局
教育次長 引野雅文
文化財保護課 課長 新谷勝行、
生涯学習課 課長 安達 純、課長補佐 坪倉武広、主任 寺田絢子
4. 内容
別紙（会議次第）のとおり
5. 公開又は非公開の別 公開
6. 傍聴人 2人

会議録

- 引野次長 皆さんこんにちは。本日はお忙しい中ご出席いただきましてありがとうございます。
それでは定刻になりましたので、ただいまから令和4年度第3回京丹後市文化芸術振興審議会を開催させていただきます。
それでは、開会にあたりまして、田中会長よりご挨拶をお願いいたします。
- 田中会長 皆様、こんにちは。暦の上では秋になりまして、萩の花が咲き、朝夕は涼しくなりましたが、まだまだ日中は暑さが厳しい中で、夏のお疲れが出ておられないでしょうか。
それこそ、文化芸術の秋になりまして、皆さん大変お忙しい中ですが、出席いただきましてありがとうございます。
田中アドバイザーはじめ、藤野先生、アドバイザーの先生ありがとうございます。
皆さん、今日まで活発に意見を交換していただきましたけれども、本日の審議会をもって、計画についての検討を終了とさせていただきます、みなさんの承認をいただき計画案を答申したいという事で考えております。どうぞ皆さん、今日の最後の会議、最後までよろしくをお願いいたします。
- 引野次長 ありがとうございました。本日の会議には、榎田委員、後藤委員、谷口委員、藤原可苗委

員、山田委員からご欠席のご連絡をいただいております。丸山委員につきましては、多分遅れて見えられると思います。

この会議は、公開で開催をいたします。本日は傍聴の方がお2人いらっしゃいます。

また、会議録を作成するために録音をさせていただきます。ご発言の際には、マイクを使用させていただきますようお願いいたします。

それでは、本日の会議録を署名していただく委員につきましては、藤原哲也委員にお世話になりたいと思います。どうぞよろしくをお願いいたします。

次に資料の確認をさせていただきます。事前に配布をさせていただいております資料を、もしも、お持ちではない方がいらっしゃいましたら、お申し出いただきましたらと思います。

まずは、次第書、資料 No1 が第2回審議会意見のまとめ、資料 No2 が文化芸術振興計画の案、No3 がスケジュールです。あと、資料ナンバーはありませんが、印刷の原稿も配布させていただきます。配布もれ等ございませんか。

それではないようですので、次に進めさせていただきます。

まず、7月26日の前回の審議会の振り返りという事で、事務局の方からざっと報告をさせていただきます。

事務局 説明

引野次長 今の報告で何かご質問等ございますか。よろしいでしょうか。

はい、それではないようですので、議事の方に入っていきたいと思います。ここからは、田中会長の方に議事進行をお願いしたいと思います。

田中会長 それでは、議事の方に入らせていただきます。

文化芸術振興計画の案の検討について、事務局よりお願いいたします。

事務局 説明

田中会長 ご説明ありがとうございます。

この資料 No2 の 21、22 のページ数が、だぶっていますね。

事務局 すみません。間違っておりますので、修正をします。

田中会長 それでは、事務局さんの方からご説明をいただいたんですけども、全体を通してという事で、先ほどの数値目標のところもご意見をいただきたいというお話でしたが、全体を通して、皆さんご意見がありましたら、お願いいたします。

委員 今見せていただいた2ページのある「はぐくむ・つなぐ・いかす」という、このイラストがすごくよくわかっていいと思うんですね。

左側にもこういうものを作られるという事ですけども、その時、今、京都府連合婦人会では、2年先に全国大会を計画しております、何を目標に皆さんに全国から京都府に来ていただいて、何をしようという事で、文化で行こうということになりました。文化庁がせっかく京都府に来てくださるんだから、文化で行こうという事になっているんですが、その時にいろいろと勉強をしていく中で、この審議会でも勉強をさせていただいていたんですが、気がつきませんでした。

文化というものには、必ず産業がついてくる。今も中に小さい字で、少し書かれていまし

たけれど、もっとそこを大切に、ここのイラストに出してほしいな。ここにも殿さんがおられたり、そうすると着るものとかいろいろなものが違ってくるわけですね。

金刀比羅さんのことも言われましたけど、やっぱり殿さんが来られて丹後ちりめんがあったから、金刀比羅さんは、こんなに大きくなったって事を言われました。

そういう文化から生まれる産業はすごく大切だし、私、丹後で織られている織物も大変すばらしいものがあるんですね。あれも、感動しますので、もう少し産業の事も書かれましたらいかがかと思いました。

田中会長 はい、ありがとうございます。その他の貴重な意見もありがとうございます。他に、他の事でも構いません。気づかれた事がありましたら。

委員 細かい事なんですけども、質問です。

アンケートなんですけど、ちょっと見ていただきたいのが、21、22 ページが2つありますけど、最初の21 ページのまん中の問6です。文化会館が欠かせないが、「市民64% 団体93%」というふうにあります、その後ろの51 ページを見てください。これは同じアンケートだとは思いますが、「欠かせない」が「市民27% 団体58%」となっているんです。こっちの21 ページの方は、「どちらかといえばそう思う」を含めた%が書いてあります。51 ページの方は、「そう思う」だけの事が書いてあるんですね。

それで、後ろの方のアンケートは、全部「そう思う」だけをしているのかなと思ってずっと見ていますと、実は、20 ページを見てください。20 ページの「興味関心がある」これは含めて「どちらかといえばある」で、63%、それから後ろの方の42 ページ見てください。42 ページの方の「興味関心がある」が63%という事で、ここは合計してあるんですね。だから、こちらは、「ある」も「どちらかといえばある」も足した合計で、両方合っているんですよ。だから、どっちかに統一しないといけないと思ったのが一つです。

それから、21 ページのところの「欠かせない」の文字なんですけど、「京都府の施設である」という事がずっと書いてありまして、「欠かせない施設だ」という意見が特に団体で多く、あわせて、維持修繕を望む声が多かった。」多かったの「か」が、抜けています。

それと、もう一つ19 ページです。問1なんですけども、項目のところ大体書いてあるんですけども、一番上の空白があります。30代40代のところがあるんですけども、上の項目のところの「市民が生き生きと文化芸術に親しむまち」の上のところは白紙になっていますね。ここは、何か入った方が。他のものを見ると全部何か入っているんです。そこは、何か入れた方がいいのかなというふうに思いました。以上です。

田中会長 ありがとうございます。気づかないところをたくさん見ていただいてありがとうございます。

その他にご意見や気づかれたところ。藤野先生お願いいたします。

藤野アドバイザー さっきの説明で気になっているところが一ヶ所あります。

8 ページの「SDGs の実現とウェルビーイングの実感」というところで、考え方そのものはすばらしいと思うんですけども、この総合計画のところでも幸福という事が言われていましたよね、市として。

そこから引っ張ってきているのかもしれませんが、最後の一文で、「あわせて、誰もが幸福

で、ウェルビーイングを実感できる市民総幸福のまちづくりに向け」って書いてありますが、ちょっとこの辺りがどういうふうに論理的に組み立てられるのかがわかりにくいなと思いました。

幸福感というのは要するに英語で言うと、happiness(ハピネス)の事で、これは主観的な問題だと思うんだけど、ウェルビーイングの概念は、下に適切な(注)がついていますが、日本国憲法で言ったら、幸福追求権第13条とほぼ同じ内容です。ウェルビーイングを実感できるという事は、けっこう重要な事で、ウェルそのものが、もちろん充足したとか満足したとか、一言で言えば、幸福という事になる。

それに対してビーイングがついているわけですね。ビーイングというのは、存在という事だから、人間という事でもあるし、そういう状態という意味でもある。ちょっと理屈っぽい話をして申し訳ありません。という事は、ウェルビーイングっていうのは、私の考えでは、いわば条件とか環境とか客観的な事ですよ。いわゆる文化政策でいうと、環境整備とかそういった事になってきて、最初の幸福は、幸福感と言われるハピネスであると。国によっては、必ずしも豊かでなくても幸福感の高い国もあつたりもするわけです。これは、もう主観的な問題で、日本は豊かになったと言われながら、ハピネスの指数は非常に低い、特異な国になります。

そうすると、全般の幸福がハピネス、主観的なもので、ウェルビーイングがいわば客観的、条件や環境の整備だというふうに考えた時に、ここの文章をどういうふうに構築していったらいいのかなという事を少し緻密に考えた方がいいかなという気がします。

なので、「あわせて、ウェルビーイングを実現し誰もが幸福感を感じる事ができる」、まあもし使いたいんだったら、同語反復ですけれども「市民総幸福のまちづくりに向け」というような位置づけかなと思いますね。

政策的に行うわけですから、まずウェルビーイングの環境整備ですね、状況・状態を行政としては整える、整備するという事が重要になってきて、そこから個人的に主観的に幸福感を感じる事ができるという流れになっていくんだろうなと思います。

ここだけ読んでいくと、幸福という「言葉」が3つつながっていて、同じような事を言っていると思ってしまうので、もしきっちり理論的に詰めていくんだとしたならば、順番を入れ替えて、最初に出てくる幸福というのは、主観的な問題だから、主観的に幸福であるという事を感じられるような条件整備としてのウェルビーイングというのが先に来た方がいいんじゃないかというふうに思います。

難しいですね、ウェルビーイングという概念そのものが、例えば社会的な社会福祉だったら、「ソーシャル・ウェルビーイング」だし、それから身体的な健康だったら、「フィジカル・ウェルビーイング」なんだし、社会的な安定だったら、「エコノミック・ウェルビーイング」、精神的な幸福感という事であると、「センス・オブ・ウェルビーイング」という事になりますので、カタカナで簡単に出てきますけれど、多義的で、奥の深い言葉ですので、せっかく使うんだったら、少し緻密に使った方がいいのかなと思います。

これが1点、もう一つ、9ページの人口が底を打つのが、令和27年で41,963人ですよ。そこから徐々に上がって行って、令和42年で46,000人になるというのは、データの

根拠としてはどういう根拠があるんですかね。

田中会長 事務局の方、お答えいただけますでしょうか。

安達課長 これも先日、ここに出典というのがあるんですけども、「国勢調査」ですとか、「京丹後市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン」で、発表されたものになります。

将来推計という事で、これまで発表していたものが、上昇のカーブになっていたものだったんですけども、それを見直すというところで、こういう事で底を打つところが令和27年という事で、そこから上がってくるというふうな見込みを立てているというところなんです。

引野次長 少し補足させていただきます。人口が今後減少していくという推測がいわゆる社人研のデータなどからは示されているんですけども、どこの町でもされていると思うんですけども、京丹後市でも盛んに移住・定住を促進するための取り組みですとか、人口減少をどうやって食い止めるのかといった取り組みをこれまでからしておりますけれども、これからもさらにそこに力を入れて取り組んでいくという事にはしています。

そういった取り組みが効果を出し始めるというタイミングが、数年後という事を見据えまして、減ってはいくんですけども、そういった取り組みもすぐになかなか効果が出る事ではないという事で、何年後かにはそういった効果も出てきて、ゆるやかに上昇の弧を描いていくというような大体そのような考え方なんですけれども。

ちょっと詳しくは、なかなか今説明はできないんですけども、そんな考えで上昇というところを推測しているという事です。

藤野アドバイザー すみません。全体的に気になった事は、多文化共生的な観点ですかね、その辺りがあまり強く出てきてない感じなんですよね。

愛着と誇りとか楽しさっていうのはあるんですけど、新たな価値につながる所でいうと、地域アイデンティティとは別なものと交わる事から生まれてくる新しい価値、交流の価値というのは必要で、人口問題とも大変深く絡んでくるんですけども、この下の解説を読んでも、「若年層の移住・定住を促進していく」って事しか書かれていませんよね。

僕は、それだけではおぼつかないというか、あまり可能性はないと思います。もちろん、子育てしやすい環境とかたくさん取り組まれている事は確かなんですけども、世界全体の状況を見た時に、やはり移民を含めて外国人の日本への移住・定住をどういうふうに進めていくのかっていう事も考えないと、地域社会はもううまくいかないと思います。

コロナ前の東京や大阪、神戸に行けば、インバウンドもそれからそこに住んでいる人もあふれるほどいて、国際都市だということを実感していたんですけども、つい2、3日前まで河合さんもそうですけれども、しばらくぶりに3週間、学生を連れてヨーロッパに行っていました。特に観光業ですね、観光業はほとんど外国人に変わっています。

それから、ある地方の劇場を視察したんですけど、そこには、2百数十人の職員が働いているんですけど、41か国の人が入働していました。ほぼ4割くらいが移民的背景を持った人たちが普通に暮らしているのがヨーロッパの社会、地方都市でもそうなんです。そうやって、ヨーロッパは維持可能になってきたわけです。

それを考えない日本の社会の将来というのは、僕は一言でいえば、あり得ないと思いま

す。今外国人の人口が1%か2%、神戸でも2%とかいう話で、国際都市では全然ないんですね。

地域の未来を考えた時に、一番重要な問題は、20年後を見据えた場合には、外国人の働き手とか若者たちがどうやってここがいいとこだと思って住んでくれるかということがとても重要で、それはインバウンド問題よりも重要な課題だと思うんですね。

それを文化政策の分野でもって、真剣に取り組んでいる町は、残念ながら日本でもあまりありません。

言葉の上では、多文化共生なんて簡単に言っていますが、外国人問題に真剣に取り組んでいる文化政策をやっているところはあまりない。だから、実際には、人口の10%くらいが移民だったりする地域はあるので、そこでは具体的にはやっていますが、という事で、この人口の上昇に関していうと、国内の人口、つまり若年層の移住・定住の促進だけでは全く不十分ではないのかなと。そうじゃなくて、外国人に来ていただく、技能研修生だけじゃなくて、もっと長く定住してもらうためには、どういう文化的な環境を作っていくか、これも先ほどのウェルビーイングと非常に繋がってくる重要なポイントじゃないかなと思いますね。その辺りが残念ながら全体的に不足しているように、そういう印象を受けます。

田中会長 ありがとうございます。本当に、ごもっともだなと思って今聞かせていただきましたが、いかがでしょうか、皆さん。

松本副会長 すみません。ちょっと差し出がましいような形で。私は、京丹後市国際交流協会の理事をさせていただいておまして、藤野先生のご発言を本当にもっともだなと思って聞いておりましたが、実は京都府の中で京丹後市は、唯一多文化共生推進プランという行政計画を作っている町なんですね。

外国人の方ももちろん、地元で私たち日本人と同じように生き生きと暮らしてもらうためには、多文化のそれぞれの良さとか違いを認め合いながらやるというのをプランとして持っているまちという事なんですけれども、確かに先生がおっしゃいましたように、記述が確かになくて、国際交流協会の副会長も来ていただいていますので、重要な視点だなというふうに改めて思いましたし、少しずつ外国のルーツを持つ方々の文化的な交流も、実は京丹後市内でもいろいろと工夫しながらやってはいるんですけれども、せっかくここまで頑張っている国際交流協会の多文化共生の文化交流の記載があれば、なお京丹後らしいなという感じもしましたので、以前私も触れた記憶があるんですけれども、たまたま例えばここには賛否がありますけれども、アメリカ軍の方々がずっと住んでおられ、その方たちとどう交わるかといったところも、文化を通じて交流するという実績とか実践もありますので、それも丹後らしいんじゃないかという話は、以前した事がありますけれども、記載があるといいなと改めて思いました。

どこにどういう記述をすればいいのかというのは、事務局の方で調整が必要かなと思いますけれども、その辺の実践の実際にやっている事もありますので、どこかにその記述があればいいのかなというふうに私も思いました。

田中会長 ありがとうございます。すみません。観光の方から、出させていただいている立場もあり

まして、私もどこかへ観光という活字は見たようにも思うんですけど、平田オリザさんの講演の時のお話、イタリアをこう小さくひっくり返したという、私にしてみたらすごくうれしくなるようなお話だったので、京都府さんなんか、今、甲斐さんがチラシを配っていただいていますけれども、三津のイベントなんかでも、観光に結びついたような、そういう人が動く事業も行われてきているので、やっぱりそこも、どんどん豊岡と連携して、そういう動きが起こってくるとずいぶん違うのかなあというのを大いに期待するところではあります。同じく今のタイミングで、ずいぶん終わりの方になってからですけれども、どこかへ入れていただけるとうれしかなと思います。

他に皆さん、ご意見いただけませんか。

委員

きれいにまとめていただいて、すごく読みやすくなったかなと思います。それで、京丹後市が今抱える課題、それから今後に向けた市の戦略等々は理解した上なんですけれども、今ごろ根幹のところに触れるのもあれなんですけれども、5ページのいわゆる文化芸術の定義のところ、1つは基本法に基づいたところ、5ページの上の文章のところ、いきますと、最初の2行ですよ。それプラス、例えばジオパークやうんぬんというところを含みます。「さらに」という第3節のところ、「自然遺産、観光、福祉、ものづくり産業、まちづくりなどを含めた多様な活動と文化芸術との連携を図ります。」とここに提起されているんですけど、読んでいった時に、どこまでが文化芸術ととらえる文だって読み手が見た時に、先ほどから意見が出ているように、産業のところとか観光のところとかも、じゃあそれも含めて盛り上げていこうという事は、ぜんぜんすばらしい事だとは思いますが、文化芸術ではないんですよ、基本的に。

それは、5ページの下のところの基本法に明記されていて、いわゆる有機的な連携が図られるような文化芸術に連携すべき他分野と言いますか、14ページの本市の文化的資源などの概況のところにくくられている、ここを京丹後市は文化芸術と共進をしながら、さらに高めていこうという、そういうコンセプトかなと思うんですが、いろいろな立場の方がこの資料を読まれた時に、例えば、着物、丹後ちりめん、これも文化芸術なんだったら、もうちょっと写真とかページを割いてほしいとか、観光の方もというふうな見方をされるのではないかなと思います。

現に、14ページが文化芸術と連携する項なのかなと読んでみたんですけど、最初にまず①で芸術が入ってますね。それから、②歴史文化、③民族芸能、④食文化、それと並列して、⑥産業も入ってしまっているんで、結局、京丹後市がとらえる芸術文化の範疇はどこなのか、それと連携するいろんな他分野の要素がなんなのかというのが、わざと5ページは、ふやかしておられるのかと思いつつ、でも、つつこむ方が見られたら、つつこまれるのかなというふうに思いますのでこの5ページと、先ほど指摘をしました14、15、16ページの①から⑥までのこのくくり方をもう少し整理をした方が、誤解が発生しないかなというふうに思いました。これが1点目です。

それから、2点目は、これは前回の発言であったと思います、6ページの障害者によるうんぬんと、触れるのはどうなんだろうかというようなご意見も他の委員からあったと思います。

これは、挙げるべきだというふうに思いますが、「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」、これは、国のいわゆる決められた文言ですので、これはこのままでいいんですけども、下の文章のところは、今いろんな自治体が障害の“害”は、ひらがなにしてみたり整理をされていますので、それを確認の上だとは思いますが、行政によっては、文書規定でひらがなに統一されたりというところがありますので、またチェックをしていただけたらと思います。

最後、3点目なんですけども、文化会館に関する12ページのところです。このくくりも、もう少し整理をされた方がいいかなと思います。京都府立の施設ですので、宝くじのふるさとワクワク劇場が悪いわけではないんですけども、京都府の主催事業を京都府立丹後文化会館がされている事業がたくさんあるので、その辺の写真の中身の検討であったり、13ページの関係団体の取り組み、この表も、いつからいつまでの掲載をしているのか、関係団体という事はいわゆる関係はしているんですけども他団体ですね。

この辺も主催者が全部あいまいで、私に関わったものもあるんですけども、例えばミュージカル辺りは文化庁のルートで京都府の主催でやったはずですし、ですから主催者がいろいろ、全部が関係団体なのかな、それからすべて網羅されているのかなというのがちょっとはてながつきましたので、例えば「最近の」とか、「過去何年間の主な取り組み」とかっていう辺りで、ここはぼやかされた方がいいんじゃないかと。うちの行事出ていないじゃないかという事がないかなと、以上ちょっとダラダラと3点申し上げましたけど、気がついたところです。

田中会長 1、2、3と文化の整理と共進というところを言われましたけれども、障害の“害”という事と、最後の3点のご意見をいただきました。その他にご意見がございます方。

委員 私も数値目標で話題になった部分なんですけども、22ページに挙げられているんですけども、その中で、2番目の「はぐくむ」「つなぐ」のところ、パーセンテージを挙げてもらっているのですが、この内容っていうのは、基本的にまたアンケートを実施しないと把握ができないという内容ですね。で、またアンケートをされると思うんですけども、それならそのアンケートで、市民の実態、どういう思いでおられるのかをアンケートで今回つかまれたと思うんですけども、やはりその内容というのは今後活かしていかないというのがあると思うんです。ですから、この2項目だけを数値目標に挙げるんじゃなくて、やはりアンケート全体でつかもうとした内容が今後どう変わっていくのか、前回とどう変わったのかというのを一つの目標の達成度を計るという意味ではいいかなと思うので、できたらそれも数値目標を挙げたらどうかという気がしました。私の方からは以上です。

田中会長 はい、お願いします。

上田委員 その数値目標なんですけれども、先ほど「1はぐくむ」で、23回から30回にしたという、それぐらいの回数ならできるだろうという事なんですけれども、倍になっていますしね。それも現状は4回、それがR9年度で15回になって、果たして30回の倍に本当にそれだけできるのかな、他はみんな下がっていったんですけども、そこがかなり自身のある数値なのかなとどうなのかなという感じがしました。以上です。

田中会長 数値目標のところのご意見、アンケートをもう一度とったらどうかとかというお話です

が、いかがでしょうか。事務局さん。

安達課長

お答えをその都度したらよかったなと思っています。すみません。

先ほどのところで言いますと、30回のところがカウントの仕方もあると思います。市の主催の事業だけではなく、京都府がいただいている事業ですとか、市に関わる子どもの文化芸術に資するような事業をカウントしていけたらと思っています。

アンケートは指標に数値目標にしておりますので、アンケートはまたとっていきたいと思っています。

委員

この数値目標で挙がっているのが、このアンケートの中の2項目だけですね。せっかくアンケートをとるんだったら、その年度の最初実施したアンケートから比較して、次でしたら、R9年度にアンケートを実施する事になると思うんですけども、その時にどうしたいのか、どういう位置まで持っていきたいのかという目標数値にすべきで、それに向けて取り組むという方向性は持った方がいいのかなというふうに感じます。ですからアンケート項目をやはりせっかくするんだったら、数値目標として捉えて、やっていった方がいいのかなと思いました。

安達課長

そうですね。アンケートは、比較ができるように、项目的には基本的に同じ質問をしようと思います。

ここでいう数値目標というのは、抜き出したといいますか、今回のこの計画をよくあらわすといいますか、そういった目標を挙げていますので、全部挙げるわけにはいなくて、しぼったというふうに思っただけならと思います。アンケートをしたものは、ここにあげているもの以外何もしないわけではなくて、アンケートはアンケートとして評価をして、この全体の計画の見直しの時に反映させていくという事ですので、ちょっとそんなふうにアンケートに関しては考えております。

あと、バラバラと言ってしまうんですが、障害の“害”の字は、今京丹後の中では、この字を使っているというふうに把握をしています。障害者福祉課という部署もありまして、この“害”を使っております。

あとは、観光の記述ですとか、国際交流の記述というところは、確かに多文化共生のプランがありますので、その辺りを市が進めている事でもありますし、ふまえながら記述を加えていけたらなというふうに思います。

観光に関しても、今回観光というのは入れております。活用するという部分で、例えば2ページの基本目標のところの「いかす」というところなんですけど、ここに文字の中ですけれども、「文化芸術の持つ力を観光など広くまちづくりに活かし」というところで、観光に活かすというところで、それに続いているのが、25ページの基本方針6のところですけども、基本方針6の基本施策3のところの「文化芸術の力を観光に活かします」というところで、ジオパークですとか、そういった織物とか機械金属、地場産業というところからめた観光での活用っていう事も、大事なところだという事で進めていくというような内容にしております。

あと、文化的資源の14ページのところは、確かに悩んだところではありました。最初の文化芸術の範囲というところから、確かにここが連動していない感じなのかなと受け取って

いただいたと思うんですが、まず5ページの文化芸術の範囲というところで言いますと、おっしゃっていただいた通り、最初の2行は法で定められた部分という事になります。これだけでは、今回のこの計画に活かしきれないなど、京丹後ならではの資源というのが、文化芸術があるという事で、そこがジオパーク等の自然資源ですとか、古墳・遺跡・文化的景観というようなところの辺りは追加でというような範囲を広げるという意味で、なので、「なお」というよりは、「さらに」の方が、ちょっと接続が悪かったのかもしれませんが。そういった文化芸術のコンテンツと言いますか、資源というのを、観光ですとか産業に活用していく、連携を図るといような説明をしているというふうに思っています。

それから、文化的資源という事で、ここに産業を入れたいなという思いがありまして、産業がこの文化芸術に当てはまるのかというところで、内部の方では議論をした事もありまして、文化的資源などという事で、などに含まれる産業のこのちりめんなどは、ここに入れたかったというところなんです。整理の仕方がここからどうがいいかというのは今ちょっとあれですが、思いとしては、京丹後の文化的資源などに産業があるというふうに考えているというところになります。

あと、最初にいただいたご意見で、このアンケートのところは、後ろと前とが連動していないというふうに思いました。「ある」「どちらかといえばある」といようなものを合わせた数字で表そうとしておりましたので、もう一回チェックをさせていただきたいと思えます。

他にもいろいろと言っていたと思います。

関係団体の取り組みをいうところでご意見もいただいて、だいたい最初のデータよりもいろいろと端折ってしまったところもあります。これは、京丹後市の合併が平成16年という事で、一応16年からいっぱい入れておりましたが、ちょっとページ数なども考えたりしまして、あと間延びするというご意見も途中ありましたので、ちょっとしぼっていった部分はあります。

ただ、確かに主催はどこか、関係団体と書いている以上、主催などが記述されていてもよかつたなというふうには思っています。

あとは、こんな事もしていたのにという事につながらないように、主なものというのと、主なものという言い方をすると主なものじゃないのかという事にもつながりそうな気がするんですが、ここは書き方を考えさせていただけたらと思います。

田中会長 それぞれにご回答をありがとうございます。

5ページのところの最後のところは、「さらに、京丹後の魅力を最大限に活かすため」じゃなくて、「活かし」の方がつながるのですか。書き方というかあれですよ。そこは、文化のところで、あとのところというお話。文化のその辺の文言の整理の仕方、表記の仕方等、もしあれでしたら、答えていただけたらと思います。

委員 いや、文言の辺りは、得意な方におまかせしますけど、課長が言われたのもその通りだと思いますし、ここが一番入れたいところかなというふうに思います。

とりわけ例えば、丹後ちりめんの絹織物って、単なる作られたものではなくて、これが本

当に芸術的だと、心から思われている方はたくさんいらっしゃると思うんです。そういうその線引きがきっちりと切れないものに対して、じゃあこの芸術的な着物の図柄の写真を紹介してほしいとかという辺りも、この辺のいろんな方の思いも活かすために5ページの提起というのはもちろん明確にされたらどうかなというところですし、やはり京丹後市の今後この文化芸術を中心として、観光とこの産業とのマッチングが一番メインなので、この2行で終わらせてしまうのは、ここが一番今後につながるころかなと思いますので、いい表現をまた考えていただけたらという、そういう思いで言っただけですので、悩まれたのもよくわかると思います。

あと16ページの産業のところ、「また」のところ、一段落としてのスペースが2つになっています。

それから、文化会館の方も、主催者を明確にしてくださいという事ではなくて、長きにわたってこの丹後で、文化会館がして来られた業績を考えれば、いわゆる箱貸しの事業ではなくて、文化会館もしくは京都府が主催で、実施をされた事業の写真がメインに来るべきだなとそれだけの事ですので、ちょっと訂正しておきます。以上です。

田中会長 ありがとうございます。そうしましたら、他ご意見をいただけない方、いかがでしょうか。アドバイザーお願いいたします。

河合アドバイザー 河合です。全体的に、読みやすくわかりやすい資料だなと思いました。

まず、具体的なアンケートの図のところですけども、40ページに回答者数についての記載はあるんですけども、それぞれの図に対して、おそらく回答者数は異なっていると思うので、すべてについて、総回答数、総回答者数を記載した方がわかりやすいのではないかなと思いました。

最初に出てくる、19ページの問1についてですけども、54ページにも同じものが書いてありまして、これについて世代別、年齢別の回答数が書かれていると思うんですけども、他のところで高校生、団体、市民とパーセントで書いてあるように、パーセントで表記してもいいのかなと。20代、30代はどうしても数が少なくなっていて、それがどうも、どれくらい多いものなのか、数だとわかりにくいというのがありました。私の感覚的などころかもしれないですけど。ここをパーセントで表示するか、各年齢別でどれくらい回答があったのかを記載してもいいのかなと思いました。

また、複数回答のところについては、後ろの資料でも複数回答のところが数字で書かれていますけれども、回答件数と回答者数をそれぞれ書かれてはどうかと思いました。

それと細かいところですけども、46ページの問13と14で、棒線に対して、表記が半分になって、すべての項目が書かれていなくなっているところがあるのが、市民と高校生とで項目が異なっていたり、今後どのような文化芸術を鑑賞したいかと、その右どなりの項目が異なっているというそこが抜けてしまったのか、あえて見やすいようになのかってところがありました。

それから、問14のところですけども、「文化芸術を鑑賞・創作したいか」のとなりに、複数回答っていうのが抜けていると思います。

細かいところですけども、グラフについては、気づいたところとしては以上です。

それから、全体的に目を通して、すごく今の京丹後市の現状について、それから社会の現状について、とてもわかりやすかった一方でこれからの取り組みについて本当に実現していくものなのか、実現されていくものなのかという具体的にイメージがちょっとつきにくいのかなという感じを受けました。というのは、おそらく取組例についてさらに、その基本方針・施策に対してさらに先にすでにやっている事、これから取り組もうとしている事、それから考えられ得る取り組みっていうのを具体的に記していてもよいのではないかなというふうに思いました。ここに書かれている事をどうやって実現するのかというところが具体的にわかると、もうちょっと本当に進んでいくんだなというのが見えるのかなと思いました。以上になります。

田中会長
安達課長

事務局さんどうぞ。

はい、ありがとうございます。

まず、アンケートのところ、ちょっと不十分なところ。ちょっとこれもしかすと、移し替えた時に項目が消えてしまっているのかもしれない。ここは、印刷のところと合わせてしっかりとしたいと思いますし、パーセント表示が適切なものですか、数が適切なものというのは、もう一回考えて、統一したいと思います。ありがとうございます。

あと、この取組例のところ、23 ページ以降、確かにここは市でもいろんな計画を作っています。そういったものもいろいろと確認しながら、これに合わせてきたんですけども、多分おっしゃっていただいています、アクションプランのような、何年にこんな事をするとか、具体的なものというの、最初そういったところもできたらいいなと思っていたんですけども、確かに今回のこの計画というのは、どちらかという概念的なところですか、進んでいく方向性とか方針というようなところの説明になっていて、あと推進者というところで、どこが主体的になったり協力したりしながら進めていくのだというところをお示しするような計画になっております。

この詳細な事業というところは、今回の計画には書ききれていないなというところがありますが、このような組み立てで、今回のこの計画は考えていたというところでありました。

田中会長 はい、それでは、ご意見がもう出尽くしましたか。

近藤アドバイザー 私の方は、先ほど何回か文化芸術のカテゴリーの話をしていて、やはりずっとお話を伺っていると、丹後ちりめんとか、すごく大切にされているんだなっていう事があって、それってやっぱり一つのアイデンティティなんだなと思うんですね。文化芸術とどうして振興していくのかということももちろん、なんかトップレベルのものを持ってきてとか、ジャンルを混ぜたりとか、異文化を超えたりとかあるんですけど、やっぱりそれが一人一人の心に落ちていって、アイデンティティになっていく事が大切なんだと思うんです。そういう意味では、これちょっとまた議論というか揉んでほしいんですけども、「など」という言葉で終わらせるのがなんかちょっともったいないなという気はしたので、それこそがやっぱり京丹後らしい文化振興の計画であるっていう一つの言葉の選び方じゃないかなと思っているので、別に私は積極的に前に出していいんじゃないかなというふうに、実は思いました。産業という言葉じゃない、違う言葉で作ってもいいのかもしれない

ですし、そんな事を思いました。

2つ目が、一番はじめの第1章のところに、これから目指す道というのが入って来て、1行目のところから現状というのが書いてあるんですけども、それがマッチングされて、4章くらいからこれからどうするのかっていう話になってくるんだと思うんですけども、たぶん前のページが、文化芸術の課題って書いてあって、その後に課題を解決するためって書いてあるので、なんか未来志向感がなくなってしまったなというのがちょっとあって、課題をもちろん解決するのも一つなんですけれども、一番はじめに定めた基本目標を実現するためにこれから何をやっていくという事が書いてあると思うので、ちょっとそこに一言入れていただいたら、もうちょっと1章で言っている事と、2章3章の現状がミックスされて4章があるという事が見えるんじゃないかなと思いました。

もう最後の一つが、さっき河合さんが言っていた事もちょっとわかったんですけども、私もなんでそういうふうに見えちゃうのかなって思った結果、私の考えなんですけれど、おそらくこれから何をやっていきますというのが、全部文字になっているから、イメージがつかめないのかなと思ったんですよね。

これまでやってきた事って、写真を撮りやすいので、イメージで訴える事ができるので、大体こんな感じというのがわかるんですけども、これからやる事っていうイメージがないので、なおさらわかりづらいと思うんです。

これは、予算次第なんですけど、イラストレーターさんとかデザイナーさんとかにご相談をして、ちょっと今後の目指す道、これをやっていったら、どういう社会になって行くっていうイメージがあるのかというのを一回相談されるといいものができるのかなというふうに思いました。

それを私は概要版を見ている時に、なんか見えてワクワクしないんですけども思っていて、さっきから考えている事なんですけれども、ちょっと予算の問題もありますけど、一度検討いただければと思います。

あと、すごく細かい事なんですけれども、どっかのページに宝くじというのが出てしまっていたので、それを見つけて削除していただけるとよろしいかと思います。以上です。

田中会長
委員

文化会館のところのあれですね。はい、ありがとうございます。

26ページのところの「推進のために」というところの最初の方なんですけれども、説明してもらっていたら申し訳ないんですけども、僕は聞いてなかったかもしれないんですけども、文化芸術実践会議っていうものをまた組織されるという事で、これはどういうイメージの会議ですか。

安達課長

はい、ありがとうございます。

これはまだ結成されていない会議の事になります。今回、計画を策定するにあたっては、この審議会というのを立ち上げて、みなさんでご意見をいただいたところになります。

審議会が今後なくなるという話ではなくて、いわゆるチェック機関と言いますか、きちんと進行しているかどうかというところをチェックしていただけるような、そういう役割を担っていただきたいと思っております。

それとはまた別で、施策を進めていくという実働部隊と言いますか、そういったところなので、いろんな分野の方々に実践会議ということで、仮になっていますけれども入っていただいて、こんな事を進めていったらいいんじゃないとか、市がこんな事をしようと思っていますって事に対してご意見いただくとか、一緒になって取り組んでいただくとか、実践というところに意味を込めているというところがあります。

別の組織を立ち上げる事ができて、一緒になって分野を超えて、いろんな施策がすすめていけたらという思いを持って、ここに書かせていただいております。

委員 はい、わかりました。ありがとうございます。

それと、名簿のところなんですけれども、うちの名簿のところ、一応理事長と書いてもらえるありがたいなと思って、よろしくお願いします。以上です。

田中会長 それでは、お願いいたします。

増田委員 私は、図書館協議会からこの審議会に来させてもらっているのですが、実は仕事で着物着付けの講師をしております、今、近藤先生がおっしゃった事に、実を言いますと、何回かこういう事を言われた事があるんです。京丹後は、去年300年祭でしたね、ちりめんが。その事を踏まえて、協議する会議にも出た事もございますし、観光、文化の面でもそうですが、この場所ではそういう事はないんですけれど、丹後ちりめんを前に出すという事をけっこう推奨するような言葉を、意見を出したんですけれども、何回か返ってきたご返事が、今は機械金属工業の京丹後だよと言われて、シャットアウトされた経験があって、私は悶々としておりました。安井さんが今日会合のはじめにおっしゃって、着物の場面が出たらいいなあと、なんとか観光のところ、少し丹後ちりめんの文言がありますが、私はどこの地域も工業製品をがんばっていますよね。

でも、どこも金太郎飴のようになっては、この京丹後の魅力が金太郎飴でなんか消えてしまいで、そこのところに違うものといえば、丹後ちりめんを前にグッと前に持つてくるといいのかなと常に思っているんです。

京丹後の女性は、丹後ちりめんの着物が大好きなんです。よそに行けば、丹後ちりめんの話を、熱を込めて話します。

先日も、長野の人に話したんですけれども、意気投合して、そんな事を自分だけじゃなくて他の方もそうなんですよね。丹後ちりめんの話をすると熱が入るねっていう話をよくするんですけども、そういう事もふまえて、この地域アイデンティティをもうちょっと広げて、この中に入れたらどうかなと思いやつと言えました。

田中会長 はい、ありがとうございます。

なんかミュージアムもできそうな動きもあるようですね。

委員 同じような意見になるんですけれども、この丹後の地域がやはりここまで豊かになってきたというのは、土台が丹後ちりめん、ガチャ万時代から一生懸命機織りをしてきて、そしてだんだんと時代の流れとともに、今はこの京丹後を代表する工業のまちでもあるんですけれども、昨年、ちりめん祭りが最後になってしまったという事で、今年は実行委員会を立ち上げて、またちりめん祭りをしようという計画があるんですけれども、そのところには、なぜそのちりめん祭りが絶やされないかと言いましたら、他の地域の方たちも、「ちり

めん祭り」という称号をねらっておられるという事で、よそに取られてしまうというそういう危機感を感じておられて、この京丹後市でやっぱり「ちりめん祭り」という、伝統的に活かしていきたいという事で、今一生懸命実行委員の方たちもがんばっていらっしゃいます。

もう文化だと思imasるので、先ほども言われておりましたけれども、もう少し今は、そういう機械金属とかに力を入れていらっしゃるかもしれないけれども、やはりこの京丹後がそういう土台の上で成り立ってきているという部分では、とても大切な部分じゃないかなと思imasるので、そこもぜひとも工夫がしていただけたらなと思imas。

それと今朝、近畿運輸局の関係の方が来られて、自衛隊関係のお話をされている中で、これからまたハロウィンとか音楽祭みたいなものを積極的に取り入れていきます、活動していきますというようなお話をされていたばかりで、やはりそういう部分では、先ほども副会長さんとかも言われましたように、自衛隊の関係もありまして、この京丹後、本当に国際的に子どもたちが外国の方たちと触れ合う機会が以前よりは多くなったなど、市民の方たちも触れ合うような機会が多くなっているという部分では、ぜひともこれも大切な芸術文化の一つとして、力を入れていっていただきたいなと思っております。

それと、河合先生の方からも言われましたけれども、やはりすべてが目指します、目指しますっていう事で、これからの事なので本当に目指していくという事なんですけれども、もう少し具体的な実現できそうなど言いますか、そういうような活動の内容も取り込んでいただけたらわかりやすいかなと思ふのと、いろいろとアンケートのグラフが前と後ろにあるんですけれども、関連したところには、端っこの方にでも、何ページというような感じの記載をしていただけたら、このアンケートはもう少し後ろを見たら詳しくこういう内容なんだなというのがわかりやすいかなと思っております。以上です。

田中会長 確かに入れていただいた方がわかりやすいかなあと思imas。

みなさん、ご意見は出尽くしましたでしょうか。藤原先生どうぞ。

委員 何度もすみません。いろんな意見をこうやって交流する事で、すごく今回も前進したのかなと思imas。

具体性については、例えば何年までにこれをやるとかって言い切るという事は、この振興計画の性格上必要ないっていうか、そんな無責任な事明記できないと思imasし、例えば数値目標であったり、主催者や実行者ですかね、主体者か、という辺りも、この振興計画を基本にして、それぞれの事業や実践の方々が、具体案を作っていくその大元になるものだと思imasるので、推進計画については、いわゆる骨格がきちっと、それからコンセプトを正確に記載するので十分かなと。一般の方からすると、じゃあこの件はどうなる、文化会館はどうなる、お金はいつまでにとって、ずっと先走ってしまいますんですけれども、あくまで振興計画ですので、これがいわゆる拠り所になって、例えば今進んでいるんですかね、都市拠点の話とかSDGsの話とか、今あったように丹後ちりめん等々の産業振興のいろんなプロジェクトが具体化していく時に、こちらの振興計画に立ち返って、照らし合わせてこれがいわゆるオフィシャルな意見や市のスタンスであったり、市民の声であったり、これに照らして、それぞれの事業が進んでいけばいい事ですので、あまり課長がおっしゃ

ったようにアクションプランを書いてもほんまにできるんかみたいな事、最初からすべてを網羅する事は不可能な事ですので、そういう辺りで、その具体性であったり、先ほど言った主体者とか、いつまでって辺りは、市の当局に僕個人としては一任、すべておまかせ、さじ加減はおまかせをして、この計画を進めていったらどうかなというふうに思いました。以上です。

田中会長 はい、ありがとうございます。

そうしましたら、みなさんのご意見は出尽くしたと思いますので、アドバイザーの方から、それぞれのご意見をいただきたいと思います。

それでは、田中アドバイザーの方から、ご意見の方、よろしく願いいたします。

田中アドバイザー 今日ご熱心な議論が続いております、非常に心強いなという感じがしておりますけれども、いくつか今までの議論を聞かせていただいた中で、こうしたらどうかなというのを参考にお伝えできればと思います。

まず人口ビジョンのお話が9ページのところで出ていましたけれども、これ今回京丹後市の人口ビジョンの中から、これ理由も含めて引っ張って書かれているように思いますけれども、今後の人口増に関しましては、先ほど藤野先生辺りからも出ておりましたけれども、そうした事も含めて、もともと国の方の地域創生という中で、こうした人口ビジョンを作っているという中ですから、一つは国が進めております、東京一極集中是正という、今回文化庁が来年の3月にやってきますけれども、ああした省庁移転ですとかこうした国の施策、都道府県を含めた産業施策とか、出生率の増加につながるような子育ての環境をよくしていくとか、そうしたものが総合的にすべてうまく行って、全国レベルでの人の流れが変わるような話の中で、ようやくこの京丹後市の人口増加にもつながっていくというような事だと思いますので、そうした点も加えて、考えたらどうかなというふうに思いました。

それと、先ほどちりめんの話がずっと出ていますけれども、16ページ、まあ14ページからですけれども、文化的資源と書かれております、歴史文化資源という事にするのも手かと思えますし、産業のところでも地場産業というのは、その土地に産まれる理由なり必然性があったと思うんですね。その土地が持っている特有の自然とか歴史と文化、そうしたものがたぶんベースには背景にはあるとは思いますが、そうした歴史やちりめんなり機会金属が産まれてきた文化的背景といったものをもう少しこの辺を強化して書かれると、いわゆる京丹後市の文化の一つと、あるいは文化をベースにしてきた産業というふうな事で、ここに記入しても決しておかしくないという形にはなるんじゃないかというふうに思います。

それから、数値目標22ページですけれども、たぶんここに書かれるかどうかは別にして、やはりこの数字が出てきた根拠とかあるいは考え方というのは、聞かれた際にしっかりと答えられるようにしといた方がいいかなと思います。

そうした事で、あるいはその根拠となった、ベースとなった数字が変わるとやっぱりこの目標自体も数値としては変わってくるだろうというふうに思いますので、そうした考え方があれば、たぶん皆様にはしっかりと理解していただけるのではないかと思います。

あとは、取組例のところの事務局の方からも少しご説明がございましたけれども、推進者の書き込みなんですけれども、実は私は、これは反対でして、特に市民のところが一番気になりまして、その26ページから推進体制のところそれぞれの担っていくような役割と言いますか、そういう事がそれぞれ書いてありますけれども、これはこれで十分だろうと。もしもう少し書きたいんだったら、こちらの方で充実をさせていったらどうだろうかと思えます。

一つずつ〇をつけておられますけれども、これで見ると、市民のところ〇がついてないのが非常に多くて市民は、なんらかの形で、たぶんこの推進の主体でありますし、すべてのこうした取組例と言いますか、基本施策の中には、なんらかの形では関わってくるだろうというふうに思えますので、一番そこが気になりまして、もうやめといた方がいいんじゃないかと思えます。よろしく願いいたします。

田中会長 ありがとうございます。続きまして、甲斐アドバイザーお願いいたします。

甲斐アドバイザー こんにちは。私も田中アドバイザーがおっしゃったところの推進者の書き方に違和感があると言いますか、すごく気になったので、特にこの基本方針というところで、どういふ事をやっていくかという事をシンプルに書いて、市民の方に見ていただくというもので、ここに推進者の表があるというのは、あまりここを注目しても、取り組み自体を読んでいただいた方がいいのかなと思うので、私もそこは強く感じたところです。

あと、この概要版は、とてもカラフルになって、見やすくなったかなという印象です。

で、今空白のイラストを入れるというところがあるんですが、こちら何かしらロゴのようなものとかキャッチーなもの、市民の方がこれを見たら、文化芸術に関する計画についての事だとわかるようなものにしたらというご意見が前回前々回とかにあったと思うんですが、それをイメージされているという事かと思うんですが、これ次第でまた印象が変わってくると思うので、そちらの方デザイナーと打ち合わせされて、いいものにしていただけたらうれしいなと思えます。

あと、京丹後らしさをもう少し出せたらというご意見が多かったかと思うんですが、そちらの方でも、実際に高校生だとか地域の方が自分たちで文化芸術を発信するというか、自分たちがやりたい事をできるような形で、私がサポートしている中で、そういう動きは小さいところで起きているなというところがあるので、そういう方たちが十分に活動できるような支援策を作っていただけたらなと思えます。

織物文化に関してなんですが、こちらの方、次世代はぐくみの分野に関しても、ものづくりっていう手を動かす事っていうので考えていただけたらいいのかなと思えました。

針仕事とか糸をさわるとかそういう事から興味関心を持っていただき、織物にも関心を持っていただけるようなそういう次世代の方、子どもの方にそういう流れを作るような学校教育の中でもそうかもしれないんですけども、蚕を飼うとかそういう事も必要かなと思うんですが、針と糸を持って自分の服に少しアップリケをすとか、そういうところから日々の暮らしの中に溶け込むような、何かしら演劇を観に行くとかそういう機会が増える事も必要かと思うんですが、日々の暮らしの中に溶け込むような施策もあつたらいいのかなと、それはまあ教育の部分かと思えますので。以上です。よろしく願いいたします。

田中会長 はい、ありがとうございます。藤野先生、お願いいたします。

藤野アドバイザー やっぱりこの十数年で、文化観というのは日本の中でもずいぶん変わってきたなという感じを受けています。

私は、国際文化学部というところで、32年間教員をやってきて、近藤なんかは初期の学生だったんですけど、最初はやっぱり外国、海外の文化に触れたい、留学をしたいというような学生が多かったんですね。

ところが、そうですね、2000年代に入って、2010年くらいからですかね、日本の文化予算なんかもどんどん減ってきてまして、景気も悪くなって、でもやはり文化政策は必要だよという話をすると、学生から出てくる答えが、海外の事を知りたい、海外に行きたいというよりも、やっぱり日本文化を守らないといけないから文化予算は必要だとか、文化政策は必要だというふうな答えが、けっこう国際文化学部内で出てくるようになったんですね。これに私は複雑な思いを持っています。というのは、私自身は、文化っていうのは固定したものではなくて、交流の中で生まれてくるもので、変化していくものだと思っているので、一方では、自己肯定感とか地域アイデンティティとかっていうのはすごく重要なので、丹後ちりめんをはじめとして地域の文化を大切にするというのはとてもとても大切な事だと思います。

この前、学生たちと行っていたほんとのドイツの本当に外れの外れですね、ルクセンブルクとの国境にあるトゥーリアっていう人口10万の町にいたんですけど、そのアイデンティティは何かというと、二つあります。

一つは、古代ローマの遺跡ですね。第2のローマと言われていたところなので、ローマについて北ヨーロッパでは一番大きなローマ時代の遺跡が残っているところなんです。2000年前の遺跡が発掘されて、それがメインの観光資源になっています。それは、中世以降、どんどん埋もれたり壊されたりしたんだけど、復興させる形で観光資源にしていると。もう一つは、ローマ人が持ってきたかと諸説あるんですけど、北ヨーロッパなんだけども、モーゼルワインの名産地です。ですから、ワインと古代遺跡と中心にトゥーリアって町は、観光と食文化で成り立っている町なんですね。

そういう強烈なアイデンティティが地方都市なのにながらとあって、このご時世コロナ禍なのに、週末は人であふれているという所です。

そういった意味では、とても地域アイデンティティは必要なんですけど、今言ったトゥーリアの町の成り立ちも、ローマ時代、ゲルマン人が入ってくるとかいろんな交流の中でできあがってきたものだと歴史的に辿ると、はっきりとわかります。

おそらくこの地域、北近畿の多くの地域というのは、日本海を通じた大陸や朝鮮半島との交流の中で、ここ独自の文化が生まれてきたんだろうと思うので、これは不動のものでも、根源的なものでも本質的なものでもないという事ですよ。

文化本質主義というのは、長らく学術の中では否定されてきて、文化というのは様々な異なるものの交流の中で生まれてくるという考え方が重要だとなってきたので、そういった観点からやはり地域アイデンティティとか文化アイデンティティという事を考えなくちゃいけないなということで、このサブタイトルに、「日本のふるさと丹後」の文化を次

世代へ〜」ってついているんですが、そういった観点からすると私は、ややちょっとドメスティックだなというような感じがします。そんな時代ではもうないんじゃないかなという感じがします。

私は、別に日本がダメだと言っている訳ではなくて、海外に行けば行くほど、どうにかして日本の良さを発見したい、特に地域社会を活かして復興したいと、再生させたいという思いで、今みたいに取り組んでいるという事があるので、日本がダメだと思っではないんですけれども、日本の中だけに閉じこもっていて視野が狭くなると、日本はダメになるでしょう。

だから、意識的に外に飛び出すとか外のものを取り入れるというような事を文化政策でもやっていくという必要があるのかなというふうに思います。

これは、大きなコンセプトの話です。それからもう一つは推進体制の話ですが、私はもうこの年ですから、何十という自治体のお仕事をさせていただいてきて、条例とか基本計画を作るお手伝いをしてきたんですけれども、多くの場合がこうやって大きく盛り上がり議論はあるんですけれども、できてしまうとその後止まっちゃうんです、残念ながら。

ひどい場合は、担当の職員の方が作る時は2年とか3年とかすごくがんばって、コンサルも入れないでよくやったなと思った途端に、すぐに異動になってしまって、それを作った事すら自治体の中で忘れられてしまうという事が時々ありました。

ですので、これはペーパーだけになってしまう可能性がかなりの確率であるんです、事実として。悲しい事ですけども、事実としてあります。

私は、最近よく申し上げているのは、推進体制をしっかりとやってほしいという事なんです。計画ができた後に、こういう形で審議会が継続されるという事がまずあります。

よく、三点セットという言い方をするんですけれども、まず条例を作られましたね、松本さんが頑張られて。条例を作られて、それを基にして今計画が作られた。

そして、審議会は、計画を作るだけの審議会ではなくて、これから10年20年先を見据えて、この作られた計画の進行管理をするこのPDCAサイクルをこのプランに照らして、DOがどうだったかをチェックし、そして改善し、アクションに向けていくという、この進行管理を担う場としての審議会は、できれば年に2回は開いてほしいなと思います。

問題は、DOを誰がやるかという話になるんですね。教育委員会が直にやる場合もあるでしょうし、それから文化振興財団や文化事業団がある場合は、そこでやっている事業があると思います。

既存の事業と計画ができたんだから、やっぱり今度新規事業をやろうよと、ここが弱かったよね、もっとこれを強化しようねというので、新規事業を打ち出してくるという事も当然あるわけですね。

その既存の事業の進行管理と新規事業をどうやって推進していくかといった時の、ここで言われている文化芸術実践会議、実践という言葉が使われているというのはなかなかいいなど、今まで聞いた事がない。

推進会議は、八尾市で僕が提案して実現できて、八尾市は、審議会と推進会議の二重体制で行われているというお話はしましたけれども、日本で初めての今自治体になっていて、

その推進会議の方は、年に8回会議をやるというようなことで、今頑張っています。幹部会を年に4回やって、そしてその推進会議が中心になって担っていくプロジェクトを何個か立ち上げて、予算をそれにつけるという形で、来年からなんですけれども、今年の秋からその準備に入ろうという事をしています。

ですので、先ほど他の委員さんからもありましたが、個別のプロジェクトを事業まで書き込むのは、責任を持ってできる事ではないので、そこまでを計画レベルではなかなか書けないですよというお話はあったんです。それは、確かにその通りなんですけれども、本当に変えていくという意欲・情熱が事務局側にも、この委員の方にも、市民の方にも文化団体の人にもあるのであれば、推進体制を本当にしっかりと組み上げていく必要があるだろうと思います。推進体制にどんなメンバーに入ってもらって、実際にそのメンバーの中で、どういう議論をしてどういうプロジェクトを立ち上げ、実行委員会形式とかで作っていくのか、あるいはその予算をどうやって獲得していくのかという事も含めて、実は来年4月から始まるとしたらば、今年度中にその推進体制の具体まで踏み込んで作っておく必要があるんじゃないかと思います。

それとは別に、この審議会は年に2回くらい開けば進行管理はできると思うんですけども、D0の部分でどこが担うのか、今○とか◎とか全部行政に○がついていますけれども、八尾の場合は、推進会議を作ると言ったので、推進会議をやるのが既存の文化事業団、つまり文化ホールがやるのかっていうけっこう微妙な線引きがあったりするんですね。

それから完全に民間の人でやるっていうところもありますので、特に名前はこだわりませんが、実践会議とか推進会議っていうのを作るか作らないのかっていう決意が今問われているんじゃないかと思います。余計な事をたくさん話しましたが、以上です。

田中会長 ありがとうございます。近藤アドバイザーいかがでしょうか。

近藤アドバイザー けっこういっぱいしゃべったんですけども、伝統の話とかちりめんの話も出ていたんですけども、伝統で残っていくものっていうものは、やっぱり昔からあるものを引き継ぐっていう点と、新しく培っていくと点と2個あって、革新していく余地をどこで残せるかという話なのかなと思うんですよ。

もう1個は、最近ちょっといろいろ見ていて思うのが、うちの地元とかでもそうだったんですけども、伝統とか地域の産業とかものづくりとかを学習の時間で教えるというのはあるんですけども、それが残っていくというのはやっぱり大事なんじゃないかなと思って。例えば、丹後ちりめんとかでも、機を織るとか色を染めるとかいろんな工程があって、そういったいろんな分野ごとに丹後らしさっていうのがたぶん隠れているんですよ。

だから、その作品そのものを教えて、これが丹後ちりめんだよっていうのももちろん1個なんですけれども、なんかもう少しこう新しくしていくために、その身体性を使うみたいな事ができたりとかすると、新しい展開で、例えばその子が海外に行った時に、そういえばうちの地元でこういうのがあったけど知らないの。そうなの違ったのみたいな話で新しいコラボレーションが生まれたりとか、そういった事が起こりうるので、なんかこう目に見えない種まきみたいな事ができるとおもしろいかなという事を思いながら、藤野さんの話を聞いておりました。

あと、推進体制は確かにとても大切なんですけれども、私はもともと現場にいたので、新しくやる事の大変さも知っていて、100%新しくやらなくても、今あるもので例えば、海外の人と一緒にやるような事業を1個やってみませんかみたいな話を少しずつ広げるという事もできると思うので、実践会議を立ち上げて実践会議で、これが叶えられるように全部がんばる、ではなくて、もう少し現実的なやり方を探せるかなというふうには思いました。以上です。

田中会長 河合アドバイザーお願いいたします。

河合アドバイザー 先ほどの具体性に欠けるんじゃないかというところを訂正させていただきたいんですけども、私がお伝えしたかったのは、アクションプランみたいな具体性ではなくて、具体的にこういう事やっていますという未来の事をもっと書いた方がいいという事ではなくて、この取組例というのが、今書かれているのが取組例ではないのではないのかなという、本当に私的などころで恐縮なんですけれども感じていて、ここの基本施策に関する具体的方策、その中に例えば地域の祭りなど伝統行事を継続するための取り組みっていう、その1個1個の中に取組例が入ってくるのではないかなというのがありまして、そういったところで、今ここで書かれている取組例の中に、まさにどういった取組例があるのかなというところが気になりました。

例えば、地域の祭り、伝統文化を継承する取り組みとしてどういうものがあるのだろうか。これからやっていくものじゃなくてもいいと思うんです。今もあるもの、これまで丹後ちりめんの話とかいろいろありましたけれども、これまでいろいろな活動をやられてきている中で、これに当てはまるのはどういう活動があるのかというところがあると、もっとイメージがついてそこから新しいものが生まれていくのにつながるんじゃないかなというのを私の中では感じました。

それからまた別の事になりますけれども、2月3月くらいまで、データベース化というのが1個どこかの中に書かれていて、それが私は日本に欠けている事で、すごく大切な事じゃないかなという事を感じています。

特に人に関するデータっていうのは大切だと思っていて、本当に芸術文化の人に関するデータっていうのは、日本で取られていないなというのを感じていて、例えば地域にどれくらい芸術家がいるのか、祭りの担い手がいるのか、それから音楽教室がどれくらいあって、先生がどれくらいいて、生徒がどれくらいいるのか、こういった事が全く目に見えてこないんですよね。

感覚的に衰退しているなというのがわかっても、それがいつの間にかなくなっていたという事にもなりかねないし、説得力がない、じゃあどうしていくかというところにつながっていきにくいのかなというのもあって、なので、そういった一つ一つのデータを取っていくっていう事、可視化する事でこれからの推進の方向性も見えてきて継続であったり、守っていくという事にもつながってくるのかなと思いました。

今回新しい計画には、そのデータベース化っていうのはなくなって、ちょっと見つけられなかったんですけども、どうかと、大切な事なのではないかなと思いました。以上になります。ありがとうございます。

- 田中会長 はい、ありがとうございました。事務局さんの方からは別によろしいですか。予定の時間よりもしかして超過しているのかもしれませんが、活発に最後までご意見をいただきました。ありがとうございます。
- 令和3年10月13日から7回審議会を大変お世話になりまして、皆さんには、ここで熱く検討をしていただきながら、本日のこの計画のご意見をいただいたのも、加味していただいて、この計画案を持って、9月30日に教育長の方へ答申をしたいと思っております。
- 答申書の案を配らせていただきますが、こちらの計画案をつけて、答申をさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。
- これで最終整理をさせていただいて、今の皆さんのいただいたご意見を答申させていただきたいと思っておりますけれども、ご承認をいただけますでしょうか。ご承認をいただけるようでしたら。
- 安達課長 ご意見をかなりいただいたので、今承認というのは厳しいのかなと、ただちょっとスケジュールもあるので、ご意見いただいたものを極力入れた状態でお示しをしたいなと思っておりますが、どのような方法にしようかなと。
- 藤野アドバイザー 見ていただいて、異議なしという事であれば、会長に一任をお願いするという。
- 安達課長 ありがとうございます。やはりちょっと直す部分が多いかなと思っております。みなさんにメールでご確認いただいた上でご返答いただくと、またそこでご意見もあると思っておりますので、なるべく早く準備をしまして、見ていただけるような状況にしたいと思っております。ご協力よろしくお願いいたします。
- 田中会長 それでは、みなさんにはメールの方でご承認をいただくまでの取り組みをさせていただいて、承認をいただくという手順でよろしいでしょうか。
- 事務局さんが大変かとは思いますが、活発に意見を出しましたので、どうぞよろしくお願いいたします。
- それでは、続きまして、答申の日時はどうでしょうか。
- 安達課長 みなさまのお手元にスケジュールを入れております。
- 9月30日に答申をして、すぐにパブリックコメントをするという状況にしております。教育委員会議にもこれにかかる必要がありまして、もしも12月の議会にかけるという方向になると、このスケジュールになります。
- 議会にかけないという事になると、もしかしたらもう少し余裕があると思っておりますが、この予定で進めさせていただきたいと思っております。今日の時点では、予定はこのままで行かせていただきたいと思います。
- 田中会長 それでは、今日の時点では、予定はこのままで進めさせていただくという事で、そうしましたら、事務局の方にお返しいたしますので、よろしいでしょうか。それでは、お願いいたします。
- 審議の方は、ここで終わらせていただきます。ありがとうございました。
- 引野次長 はい、田中会長様、ありがとうございました。
- また、委員の皆様には本日も活発にご意見いただきましてありがとうございました。
- それこそ、7回にわたりまして、ゼロからのスタートという事で、本当にみなさんに助け

ていただいて、事務局として十分に意見が組み入れられていなかったりしたところもあったと思いますが、ここまで作り上げてくる事ができました。本当にありがとうございました。

また、答申をいただいて、その後も来年度に向けての会議も予定がありますので、また引き続きよろしくお願ひしたいというふうに思います。

それでは、閉会にあたりまして、松本副会長様の方からご挨拶をいただきたいとしたいと思います。

松本副会長 はい、失礼いたします。本当に皆様お疲れ様でした。

アドバイザーの先生方からは、その都度その都度、的確なアドバイスをいただきまして、本当に感謝しています。ありがとうございました。

今日、たくさんのご意見をいただきましたので、先ほど事務局の課長の方からありましたように、少しそれに整理をした上で、メールを使って皆様にお届けするという事ですけども、30日の答申に向けてやっていきたいというこのスケジュールは、その通りに進めていただきたいなというふうに思っております。

本当にゼロから皆様のご意見を基に一つ一つ積み上げていった計画だと思っております。振り返りますと、議員提案で条例を作って、こういうものがあるんじゃないかという事からはじまって、計画を作ったのがゴールではなくて、いよいよこれからようやくスタートラインに立ったのかなというふうに思っております。

これから問われるのは、ご参加いただきました審議会の皆様、これから計画を作った審議会の皆さんは、これを推進していくエンジン役として、各界のそれぞれ代表的な立場の皆さんにお集まりいただいておりますので、引き続き推進のエンジンをふかせてもらえたらなと思っておりますし、市の当局の方につきましては、予算をどうするのかといった事だとか、推進関係は、市民も含めた体制だとは思いますが、では市役所の方の推進体制はどうか。今、生涯学習課が中心になっていただいておりますけれども、文化芸術の推進室というものを具体的に作るかどうかだとか、そういった今度は行政の本気度というようなものも問われてくるのではないかなとは思っております。

いずれにしても、この1年間この審議会の皆様には、それぞれの立場で多様なご意見をいただきました。推進のための実践会議を作るという方針もこれに明記されましたので、これからはいよいよスタートラインに皆さんと一緒に立ってですね、この計画が本当に実のあるものになっていくように、ぜひこれからも皆さんのお力をお貸しいただきますことを、引き続きお願ひをして、終わりの挨拶とさせていただきます。

本当にお疲れ様でした。ありがとうございました。

引野次長 はい、ありがとうございました。

それでは、以上で閉会とさせていただきます。お疲れ様でした。ありがとうございました。